

ふるさと便り

藤本 晴子

「ふね」と言えば、播淡汽船（現ジェノバライン）を指した世代にとって、淡路島から島外へ行くときには、客船やフェリーが専らの交通手段でした。岩屋港から明石港まで、団体でバスの利用の時は、大磯港や阿那賀港からの乗った記憶がありません。

夏、生穂へ帰省した折、偶然「ヨット」と「帆船」と書かれたチラシを目にし、本当に津名港に来るの？と



現在は定期航路のない港。半信半疑ながら自転車で七〇八分の距離。近くで見たい。細やかな憧れを抱き実物を見学に参りました。

走し、大阪北港からそれぞれ津名港へ参りました。

七月二十一日（日）朝、「入港記念式典」が、港に張られたテントで行われ、門康彦市長挨拶の後、船長が入港の経緯等と話されました。司会の女性はかつて淡路市地域おこし協力隊に勤められた横山史様で、思わぬ再会にお互い驚き合いました。横山様は、平成二十八年度第七十四回総会に、ご来賓で出席された事もあり、大変ご活躍された方でした。

簡単に二艇について述べます。帆船“Ami号”は二〇一八年夏、

「韓国〜ロシア間の国際帆船レース」に参加し、静岡県沼津港から、ヨット“サザンクロス号”は「あきない夢まち港、弁才船の航跡」を完

帆を張るところを見学しますと、

長時間荒波の中を航海し破けて傷だらけの帆にいくつも当て布が張ってありました。船内は二段ベッド、ミニキッチン、シャワー、トイレ、テーブル&ベンチはダイニングルームにぴったりで、何れもコンパクトで無駄のない設計です。“Ami号”は、定員二十名、“サザンクロス号”は定員十五名。共に帆を上げるととても大きく見えます。因みに、“Ami号”は船長のお嬢様のお名前だそうです。（クルーのお話し）

往復ハガキで体験乗艇の申し込みをしていなかった為、「見るだけ」と思っていましたら、欠員が生じ、運よく“サザンクロス号”に乗る事ができ、いざ出向。見る見る津名港

から遠ざかり、小さくなっていく中、母校の津名中学校と津名高校が、高低で隣り合っているのが見え、釜口の「世界平和大観音像」も確認出来ました。

くあり、新鮮にも感じられます。斯くして「一と夏」の経験は終わりました。

「バーに両手でしっかり掴まって下さい」と出港前の注意事項に従い、体を動かさず視線のみ。天候は風弱く曇り空。この時期、炎天下であれば干上がっていたのではないかと思いい、梅雨明け前のお天道さまに感謝。予想していたほどの揺れは少なく、幼児や小学生達も、景色を肴におしやべりしつつ、小一時間のクルージングを楽しみ、細やかなハッピーを満喫できました。

大鳴門橋と明石海峡大橋の開通で、本州と四国が陸続きになって二十余年。飛行機や新幹線からバスで帰省する様になり、「ふね」は懐かし